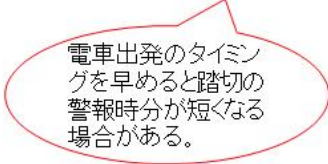
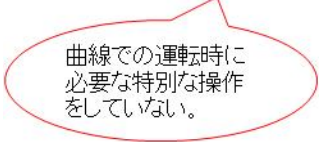



業 種	鉄道
取組分野	事故、ヒヤリ・ハット情報の収集・活用
テ ー マ	運転の安全に係るリスク情報等の積極的な収集と円滑な共有
取組の狙い	<p>運転の安全に関わる危険要因について、運転の当事者からのみならず、第三者の視点からの気付き情報を収集しています。</p> <p>また、運転の当事者等が体験したヒヤリ・ハット情報について、当事者が自分なりに考えた事故防止策を、社内委員会による事故防止策と併せて公表することにより、従業員の安全意識の向上を図っています。</p>
具体的内容	<p>1. 運転の当事者のみならず、所属外の他部署等の職員が気づいた運転に関わる危険要因を「事故の芽投稿箱」、「聴き取り」等により、収集しています。</p> <p>当初、他部署からリスクを指摘する方法は、抵抗感があると想定されましたが、会社規模が大きくなり、もともと風通しのよい環境にあったこと、「危険情報の共有化は、自分のため・仲間の安全を守るため」という意識が社内で浸透したこと等があり、違和感なく導入できました。</p> <p>こうした運転の安全に係るリスク情報は、毎月集約され、社内のリスク検討委員会に関係各課・係より定期的に報告されます。その後、当該委員会及び「輸送安全対策会議」で分析・検討され、対策を付して職場で公表されます。</p> <p>2. また、各人が体験したヒヤリ・ハット情報について、体験者による“自分なりの事故防止策”と、「輸送安全対策会議」等の社内委員会で分析・検討された“運転係の対応”とをセットにして、定期的に社内各所に提供・掲出しています。</p> <p>3. なお、これらの取組みに対する社員のモチベーションを維持するため、確実に情報提供者に対し、会社としての具体的な検討結果をフィードバックしています。(別添の事例参照)</p>
取組の効果	<ul style="list-style-type: none"> ・新たな視点での、他部署からのリスク指摘の中には、普段気付かないものがあります。 ・「ヒヤリ・ハット」への対応策について、当事者の“自分なりの事故防止策”を、会社としての対応方針と併せて社内で提供・掲出することにより、社員自らが安全を考え、作り出していくという姿勢につながっています。
事業者名	神戸電鉄(株) 鉄道事業部 安全対策部 (連絡先:078-592-5820(代))

○運転の安全に係るリスク情報の検討結果の事例

報告日	報告部課	対象部課	安全を損なうと思われる情報	対策
2009. 6/9 No.1	安全対策部	運輸課	早発による踏切警報時分の短小 出発信号機近傍に構内渡線道を含む連動駅出発時、出発信号現示後相当時分経過後、出発指示合図が表示されるが乗降客が少なく表示後直ちに戸閉操作を行い出発すると前方構内渡線道の警報時分が短くなり危険である。 	[報告者が考える対策] 出発時刻を厳守する(出発信号現示と出発指示合図とのタイミングは運転士による戸閉操作、確認などのパターンを考慮したものである。) [検討委員会の対策案] ①運転士に踏切遮断時機等駅の特異性をプリント指導等で認識させる。 ②現示遅延対策について費用対効果を含め検討する。
2009. 8/24 No.17	車両課	運輸課	上り勾配を運転中、曲線に対する速度制限箇所を 3000 系車両で通過する際、力行ノッチの戻しをしない場合が多い。 (抵抗カム軸が逆転しない。) 	[報告者が考える対策] 運転士に曲線に対する速度制限の意味を理解させ、脱線の危険度が上がること、車輪・レールの磨耗が進み、経費がかかること等を教育する。 [検討委員会の対策案] ①9/14～9/17 の集合教育で規定速度の厳守について教育徹底する。

○ヒヤリ・ハット情報の掲示事例




下り列車担当時、志染駅下り場内信号機に対する遠方信号機の通路予告機を確認する際、電柱に重なり右方開通に見えて入駅番線が違ふと思ひ制動をかけようとしたら、本線開通を確認しヒヤットした。

自分なりの事故防止策

2・3回その区間を走行することで建楯位置関係及び、直線で場内信号機の現示状況を確認できるので、そのことを把握して運転している。

運転係の対応

主体の場内信号機の確認距離を補うために設けられており、ハッキリ確認できた地点で確認喚呼すること。



夜間、下り列車を担当して始発台駅3番線に入駅する際、先行の三田行きが同線に停止していたため第2場内外方で一旦停止後、前照灯を消灯させた。同線停車中の三田行きが出発したので信号現示に従い前照灯を点灯させず起動したところ、構内渡線道を横断する係員を発見、慌てて前照灯を点灯させて注意喚起を促し進出した。

自分なりの事故防止策

前照灯が列車標識であることを認識が欠如していたため、安易に消灯させた。今後は消灯させず、減光に留めておくよう徹底する。

運転係の対応

前照灯を列車標識であることを再認識させるとともに夜間においては終着駅以外、消灯させず減光に留めておくよう取扱いを周知徹底させた。